

複文試論

——主節・従属節の関わりと階層を中心に

姚 宇 龍

A Study of Complex Sentences

Yao yulong

はじめに

文章は数多くの文から構成されている。一口に文と言っても、それには短い文もあれば、長い文もある。また、文の構造から見ると、単文もあれば、複文もある。単文は、その文中に主語、述語等の文の成分が全部出揃ってもそれらが複雑に関わり得ないので、構造的にはわりと簡単である。一方、複文はその文中に単語のかわりに従属節が文の成分という役割を果すので、単文より構造的に複雑で、しかも千変万化である。しかし、いくら複雑な複文でもその文中の節の関わり方や排列の方法は文法上のルールに基づいて成り立っているのである。複文は必ずその主幹としての主節がある。その主節に沿っていけば、従属節は次々と浮かんでくる。

日本語の複文は多くの日本語学者によって研究されているが、複文の中の主節と従属節の関わり方に関する研究はあまりされていないようである。この論文では、複文の主従関係を文の構造と文の成分の両面から論じる。複文の構造的な特徴を分析し、複文の主節と従属節の関わりや排列などを階層を中心にパターン化することを試みる。

第一章 文の基礎たるもの

複文の主従関係と階層などを把握するための前提条件として文の基本的な構成要素の熟知が不可欠である。複雑な複文を研究し良く理解するためにはまず文の基礎から着手し、文の構造を支える基礎たるものを整理する必要がある。

一、文の構成要素

人は自分の考え、思想などを表わす時、その方法は口頭にせよ、書面にせよ、一定の文法規範に基づいて文を作らなければならない。文には二つの文法的な構成要素がある。それは品詞と文の成分である。文におけるこの2者の役割は、ある身分を持つ品詞が文の中でどのように働くかのことである。日本語の品詞の定義や種類について日本語学者の意見はほぼ同じであるが、文の成分については、まちまちである。

1、日本語の品詞の分類

品詞とはすべての単語を文法上の性質によって分類したものである。日本語の品詞はだいたいつぎのようなものがある。

動詞(自動詞, 他動詞) 助動詞	形容詞 形容動詞	用 言
名詞 代名詞 数詞		体 言※
副詞		

連体詞	
接続詞	
感動詞	
助詞	

1) 用言

上表の中に12種類の品詞が列挙されている。その中の動詞、形容詞、形容動詞の総称は「用言」と言われている。「用言」は日本語の特有な概念である。助動詞は用言として認められていないが、活用できる点では、動詞、形容詞、形容動詞とまったく同じということを考えると、用言の範疇に帰させてもいいのではないか。強いて言えば、「準用言」的な存在である。そのゆえか、完全に活用できる助動詞を形式用言と言う学者もいる。また、形式が固定されている活用できない形式用言もある。それには「について」、「にとって」、「にかけて」、「によって」、「にかぎって」、「における」、「として」などがある。

日本語の動詞は、使われていない時と辞書に収録されている時とまったく同じ形をしている。そのゆえ、辞書形や原形や基本形と呼ばれる。日本語の動詞が実際に話や文の中に使われる時、その使い道に応じて語尾変化が発生することは動詞の語尾活用、変化後の形は動詞の活用形と定義される。動詞の語尾活用は文字通り動詞の語尾変化によって実現されるのである。動詞の活用形は全部で六つあり、一つの活用系統を成している。しかし、いまの日本語教育現場では、その活用系統を軽視する向きがある。複文には動詞の活用形が深く関わっているの

で、ここに動詞の六つの活用形をまとめてある。

2) 体言

日本語の文法では、名詞、数詞、代名詞を総じて名詞と称している。また、名詞、代名詞、数詞の総称は「体言」である。その意味で言うと、日本語の体言は名詞に等しい。

「用言」と同じように、「体言」も日本語の特有な概念である。

名詞は事物の名を表し、また事物を静的に捉える語である。

数詞は数量を量り、また順序を数えるのに用いる語である。

代名詞は人や事物の名称のかわりに用いられる代用形の名詞で、人称代名詞と再帰代名詞と指示代名詞がある。

形式体言は文法上の必要性により形式的に体言として使われている語である。普段一番よく使われている主な「形式体言」は「の」と「こと」で、それに「ところ」、「もの」、「わけ」、「はず」、「ため」、「つもり」、「ほう」、「まま」、「とおり」、「かぎり」、「かわり」、「しだい」、「くせ」、「うち」、「もと」、「うえ」などがある。

2, 日本語の文の成分

文の成分は、品詞が文法規範にしたがって文の中で特定部分を構成し特定の役割を果すものである。同じ単語でも、適用する文法と文中で果す役割の違いによっては、違う成分になる。

例えば、「私」、「あなた」、「彼」、「助ける」という品詞は、使い方によっては、文中で違う成分になる。

	五段動詞		一段動詞	サ行変格動詞	カ行変格動詞
	否定	推量	上一段動詞・下一段動詞		
未然形	あ	お	～ い ・～ え	～ し ・～ せ ・～ さ	こ
連用形	い		～ い ・～ え	～ し	き
終止形	う		～ いる ・～ える	～ する	くる
連体形	う		～ いる ・～ える	～ する	くる
仮定形	え		～ いれ ・～ えれ	～ ずれ	くれ
命令形	え		～ いよ , いろ・ えよ , えろ	～ せよ ・ しろ	こい

“私は 彼を 助ける。”
 代名詞 代名詞
 主語 目的語

“彼は 私を 助ける。”
 代名詞 代名詞
 主語 目的語

上記前の文の中の「私（代名詞）」は主語であるのに対して、後の文の中の「私（代名詞）」は目的語である。上記の「彼」も同じである。同じ品詞の単語が使われているが、適用する文法が違うだけで、文の全体の意味が変わった。

文の成分は文を構成する上で欠くことのできない要素なので、すべての言語に文の成分がある。そのような共通性がある一方、各言語の文の成分にはそれなりの特殊性がある。日本語の文の成分は分け方はそれほど厳密ではない。それを巡っては、言語学者や文法学者は色んな分け方を主張している。

例えば、つぎのような主張がある。文の成分とは暫定的につぎのようなものを設定する。「述語」、「主語」、「補語」、「状況語」、「言表事態修飾語」、「言表態度修飾語」、「接続語」、「独立語」、「規定語」、「並立語」である。『日本語文法研究序説』^{P146仁田義雄}

日本語の文の成分を主語、述語、修飾語（連体修飾語、連用修飾語）、独立語と分ける主張もある。連体修飾語は体言を修飾し、連用修飾語は述語の状態、程度、方向、場所、目的、対象、結果などを表すものである。連体修飾語は文字どおりの役割であるが、連用修飾語は用言に連結するものの、必ずしも修飾するとは限らない。例えば、状態、程度、場所、目的を表す連用修飾語は述語や用言を修飾するものであるが、述語の動作が及ぶ対象を表す連用修飾語を目的語、方向、結果を表す連用修飾語を補語と認識した方がいい。

上記の主張に一つの共通点がある。どちらも主語と述語の存在を認めている。

ここで日本語の文の成分について考査しよう。

本論文では日本語の主な文の成分を主語、述語、目的語、連体修飾語、状況語（連用修飾語）、補語、対象語、独立語と並立語という九

つに分類する。

1) 主語

主語は文が表す事態や動きや状態等の主体となる成分である。

例：

① 中村さんは大変忙しい人です。
名詞

② 彼女は必死に叫んでいる。
代名詞

③ 一つなら足りない。
数詞

2) 述語

「述語は動きや状態や属性や関係といった語彙的意味を担い、自らに依存・従属してくる他の諸成分をまとめあげ文を形成する。」（日本語文法研究序説）つまり文は述語を中心に構成されているとのことである。

述語として働ける用言は次の通りである。

① 動詞

② 形容詞（い型形容詞、な型形容詞）

③ 判断助動詞：だ、です

述語となる上記の用言によって日本語の文はつぎの4種類に分類できる。

① 判断文：文末の用言は助動詞“だ”、“です”または動詞“である”

例：彼は 学生です。
主語 述語

これは 教科書である。
主語 述語

② 描写文：文末の用言は形容詞または形容動詞

例：今日は 涼しい。
主語 述語

ここは 静かだ。
主語 述語

③ 存在文：文末の用言は“いる”、“ある”

例：劉さんは 家にいる。
主語 述語

売店は二階にある。
主語 述語

④ 叙述文：文末の用言は動詞

例：王さんは 日本語を 勉強する。

主語 目的語 述語

王さんは来る。
主語 述語

3) 目的語 (客語)

目的語は主語の動作が及ぶ対象, 内容を表す成分である。目的語は名詞, 数詞, 代名詞などの体言が充当する。述語に直結するので連用修飾語と言う学者がいる。

- ①私はノーベル文学賞作家川端康成の作品『雪国』を読んでいます。
- ②私はすりに財布を掏られた。
- ③父の放蕩が母を悩ませた。

4) 連体修飾語

文の中の体言(名詞, 数詞, 代名詞)を修飾する成分。連体修飾語の形式は大体つぎの通りである。

- A, 「体言+の」が体言を修飾する。
 - 名詞+の 日本のお菓子
 - 数詞+の 三つの要点
 - 代名詞+の 私の姉
- B, 「用言の連体形」が体言を修飾する。
 - 形容詞 (い型形容詞) 美味しい日本料理
 - 形容動詞 (な型形容詞) 和やかな雰囲気
 - 動詞 (助動詞と一緒に使っても可) 来る年 優れた人物
- C, 「連体詞」が体言を修飾する。
 - こんな態度
- D, 「副詞+の」
 - 暫らくの間
- E, 「名詞+から+の」
 - 昨夜からの雨
- F, 「文」または「節」が体言を修飾する。
 - 大学に編入したい人

5) 状況語 (連用修飾語)

連用修飾語は述語や用言に直接修飾したり, 文全般を修飾するという外部形式から見れば, 文字どおりの名称である。その一方, 内容的には, 連用修飾語は色々な状況つまり述語及び用

言が表現する事態の発生場所, 時刻, 原因, 程度, 状況, 条件, 目的などの状況を付随的に説明する成分である。そのことからこの論文では連用修飾語を状況語と称する。

連用修飾語は用言に直結することから, 学者によっては, 述語に直結する目的語と補語も連用修飾語と認める。しかし, 目的語と補語は述語や用言を修飾するような役目がない。ここでいう連用修飾語は目的語と補語を除く状況語のことである。状況語という意味の連用修飾語は大体つぎのとおりである。

- ①数詞+に 時間状況語
 - ……7時に起きる
- ②数詞
 - ……日本酒を一口飲んだ
 - ……体重2キロ増えた
- ③名詞+に 時間状況語
 - ……6月に行く
- ④名詞+で 場所状況語
 - ……旅館でアルバイトする
- ⑤名詞+で 原因状況語
 - 濃霧で高速道路が閉鎖された
- ⑥副詞 程度状況語
 - 今日はとても暑い
- ⑦形容詞 (い型形容詞の連用形)
 - ……うまく説明してください
- ⑧形容動詞 (な型形容詞の連用形)
 - ……静かにしなさい。
- ⑨擬声語・擬態語
 - ……わざと見ない。

6) 補語

補語とは述語の表す動きや状態や関係などの成立にとって非中心的に参画する構成要素, 言いかえれば, 述語が必須的に要求する要素のうち, 動きや関係などの体言主として表層に実現される要素以外の要素である。「日本語文法研究序説」つまり, 補語は中心的でもなく, 非中心的でもなく, 補足的に参画する要素である。

- ①体言+へ
 - ……これから会社へ戻ります。
- ②体言+に
 - ……日本人に少林寺拳法を教えます。

- ③体言+と ……ロシアはアメリカ
と核兵器削減条約を締結した。
- ④体言+から 私は中村さんからお金を借りた。
- ⑤用言終止形+と 彼は来ないと言いました。
- ⑥体言+を 私は毎日公園を散歩します。

上記の補語は文の中で述語を中心に役割を果たしているの、それを連用修飾語と見ている学者もいる。形式から見ると、妥当性のあるものである。しかし、文の成立に非中心的に参画する本質から見ると、上記の補語はやはり文の成立にとって中心的に参画する状況語という連用修飾語とは異質なものである。したがって、連用修飾語をその文中の細かい役目によってさらに目的語、状況語及び補語に分けるのが妥当であろう。

日本語の文の成分は上記の六つに加え対象語、並立語と独立語もある。

7) 対象語

対象語は人間の心理活動や好ききらいを表す動詞、形容詞と形容動詞の前にある。対象語は「が格」を使うが、主格の「が」とは違い、実質的には目的語的な意味合いがある。

例：私は彼が好きです。私は焼肉が食べた
い。

8) 並立語

並立語の特徴は、主語、目的語などの成分に同じ成分が並立することである。

例：私は芸文学科の漫画・アニメコースか
絵画コースに編入したい。

9) 独立語

例：あなたたち、前のほうに坐ってくださ
い。

二、文の成立の最低条件と構造

1) 文の成立の最低条件

構造論から言うと、文は文法規範により文の成分から構成されるものである。一体必要最低限にどのような成分があれば、文が成立する

か。

私は 来る
主語 述語

彼は 学校に 行く。
主語 補語 述語

私は 学校に いる。
主語 補語 述語

上記の文は何の言語環境も前後の文もなくとも、その意味が私たちに伝わってくる。しかし、後記の文は、前記の文より少し長いにもかかわらず、言語環境や前後の文がないと、その意味が私たちに伝わってこない。もちろん文とは言えない。

昨日学校で李さんが王さんを_____。

(述語が欠けている)

昨日学校で_____王さんを殴っていた。

(主語が欠けている)

上記の例で証明されているように、なんの言語前提も言語環境もない話し始めの文(始発文)の場合、発せられた話しや文はその成立のための最低限必要な成分として、主語と述語を欠かすことができない。

必要最低限に主語と述語があれば文が成立するということから、日本語の文の一番簡素なパターンは大体つぎのようなものと言える。

例：彼は 泳ぐ。今日は 寒い。
主語 述語 主語 述語

彼女は 学生です。
主語 述語

2) 文の構造

述語を中心に文の成分が互いに関わり合うものは文の構造である。単式構造でもある。文の成立の条件で分るように、一番簡潔な始発文の構造は主語と述語から構成されるものである。主語・述語(主述)構造は文を構成する基本構造である。そのほかにつぎのような構造もある。

①目的語・述語構造 ご飯を食べる

②補語・述語構造 椅子に坐る

③連体修飾構造 やさしい人

④連用修飾構造 真面目に勉強する

主述構造は始発文として成立できる構造であ

るが、それに目的語、連体修飾語、連用修飾語、補語などを併用することができる。

例①：私は明日子供たちに日本の歌を
主語 状況語 補語 連体修飾語 目的語

教える。
述語

例②：日本、ドイツ、インド、ブラジルの
連体修飾語

4カ国グループは、国連に
主語 補語

安保理拡大案を正式に提出した。
目的語 状況語 述語

上記の文に主語、述語の他に状況語、補語、連体修飾語と目的語などの成分も存在している。

第二章 複文の基礎構造の分析

一、複文の定義と構造上の特徴

1. 複文の定義

複文を論じる前に、まずその定義即ち複文を判断する基準をはっきりする必要がある。日本語学者たちは日本語における複文について統一した見解を持っていないようである。「一つの文の中に述語の形式をした要素が複数存在する場合について考えますが、日本語では単文と複文の区別がそれほど容易ではありません。」【新しい日本語学入門・ことはのしくみを考える】この主張は、日本語の単文と複文の境界線がはっきりしていないことを強調している。

『「複文」とは述語を中心として組み立てられた構造体が複数個存在する文、すなわち、述語を中心としたまとまりが二つ以上集まって構成された文のことである。』との主張がある。【複文】p1より

複文の定義を考える場合、その従属節から立ち上がったほうがいい。

上記の定義は複文の本質を概念的に述べたが、「述語を中心としたまとまり」はどのような構造か、その構造の述語に他の成分はどのように関わるか、をはっきり言及していない。しかし、これをはっきりさせないと、単文か複文か

は判断できない。したがって、まずどのような成分が述語に付いて一つの構造体を構成することができるのかを検討しよう。

述語に主語が付けば一つの主述構造ができる。主述構造は始発文として無条件に文が成り立つ。したがって主述構造が2個以上あり、しかもお互いに主従関係になっている文は複文である。前述二、2)の①の目的語・述語構造と②の補語・述語構造は始発文としての主述構造ではないが、述語を中心とした構造なので、複文を構成する節として認められる。④の連用修飾語・述語構造は状況語が動詞を修飾する構造なので、述語を中心とした構造である。

複文の構造上の特徴は、文の構成要素としての成分は、一つの品詞や単語に限らず、主述構造または述語を中心としたまとまりを持っている節も充当できる。この論文で提起する複文の定義はつぎのような表述である。「複文」とは文として成り立つ主述構造や節として認められる、述語を中心として組み立てられた目的語・述語構造、補語・述語構造、連用修飾語・述語構造などの構造体が2個以上存在し、しかもお互いに主従関係を構成する文のことである。この定義は複文の判断基準になる。

① ラーメンを 食べたい人は
連体修飾語節

目的語 述語

手を挙げてください。

文中の述語・目的語構造が述語を中心としたまとまりとして複文の中の節と認める。

② 国へ 帰る時、日本のお土産をたくさん
連体修飾語節

補語 述語

買う。

文中の述語・補語構造が述語を中心としたまとまりとして複文の中の節と認める。

③ 早く 起きた学生は授業に遅れなかった。
連体修飾語節

状況語 述語

文中の状況語・述語構造が述語を中心としたまとまりとして複文の中の節と認める。

これまで、文の構成要素としての品詞と成分

を分析したが、これらの要素でできた節がどのように関わり合うか、を分析することは複文研究上極めて重要である。

2. 複文の主述構造、述語を中心とした構造物（節）間の相互関係

複数の主述構造又は述語を中心としたまとまりが存在する複文には必ず主従関係つまり主節と従属節との関係がある。その主従関係は複文の構造上の大きな特徴である。主節は1種類しかないが、従属節は数種類もある。

文の成文を分析する時、主に主語、述語、目的語、連体修飾語、状況語（連用修飾語）、補語と対象語などの7種類を列挙した。文の構造上原理として、文の成文になれるのは単語や言葉だけでなく、節も同様である。それで、複文の中に色々な名称の従属節が存在する。

二、従属節の種類

前記の例文で分るように、複文中の節間の主従関係は主節と従属節の関係である。主節と従属節の関係は、述語を中心としたまとまりである従属節が一つの文の成分として主節全体または主節の中にある一つの文の成分を修飾することから生じる。複文にどのような従属節が表れるか、従属節の種類がどれぐらいあるか、それは複文を研究する上で極めて重要な問題である。「名詞節、連体節、連用節、並立節という4つの型の従属節を概観」という主張がある。

〔複文〕^{p.11} 複文の中の節は二つの文法的な側面があり、第一、節全体が一つの品詞（名詞節は名詞、連体節は形容詞か形容動詞、連用節は副詞）と見なされることと、第二、節全体が文の成分という役割を果すことである。文が文法に準じて品詞と文の成分という2要素により成り立つからである。上記の「名詞節」という名称は品詞という側面に注目しているのにすぎない。しかし、複文中の従属節の分類はその品詞の側面からではなく、複文の中でどのような役割つまりどのような文の成分として働くかということに着目すべきである。名詞節は複文の中で名詞として文の成分の役割を果すので、品詞の名称のかわりに文の成分の名称を付けるべきである。

「名詞節というのは、格助詞や主題を表す助詞を伴って補足語や主題として働く従属節のことである。」〔複文〕^{p.11} 名詞が主語（が格）、目的語（を格）、対象語（が格）、一部の補語（に又はと格）と組めることから、名詞節を更に主語節、目的語節、対象語節と補語説に分けるのが妥当である。従属節の種類と数は基本的に文の成分と同じである。文の成分は主に主語、述語、目的語、連体修飾語、状況語、補語と対象語がある。それに対応して、従属節は主につぎの7種類ある。

主語節	複文の中の主語
述語節	複文の中の述語
目的語節	複文の中の目的語
連体修飾語節	複文の中の連体修飾語
状況語節	複文の中の状況語
補語節	複文の中の補語
対象語節	複文の中の対象語

上記の7種類の従属節は複文の中で文法規範に準じてそれぞれの役割を果す。複文の中に少なくとも従属節が1個ある。従属節が多ければ多いほど複文は複雑になり、従属節と主節の関わり方も千変万化になる。従属節の多い複文の構造は複雑そうに見えるが、上記7種類の従属節の特徴と、従属節と主節との関わり方さえ把握できれば、いくら複雑な複文でもその仕組みの全体像と意味が容易に把握できる。

1. 複文の主語節

この種の従属節の特徴は、複文の中に一つ主語節を含み、その従属節全体が主語となることである。つまり、単語の代わりに一つの従属節が主節の主語として働くことである。主語節は名詞節である。主語節が節として認められる以上、節末がある。この節末こそ主節との接点である。この接点をうまく見つけ出せば、双方の主従関係も歴然になる。

1) 主語節の節末用言

日本語の文末や節末の品詞が用言に限るので、主語節の節末の品詞は勿論用言である。具体的に形容詞、形容動詞、動詞及びそれらに付く助動詞という品詞なので、主語節の節末用言

は形容詞，形容動詞，動詞かそれらに付く助動詞に限る。

2) 主語節の節末用言の活用形

主語節の節末用言——形容詞，形容動詞，動詞及びその3者に付く助動詞の活用形はすべて連体形である。というのは主語節の節末には必ず“の”か“こと”などの形式体言が付くからである。

主語節の節末用言は連体形であるが，実際に文中に表れる時，ボイス，アスペクト，テンス，ムードなどの形態素も層という形でそれに加わるので，必ずしも現在形や肯定形とは限らない。過去形，否定形，進行形もありうる。また，節末の用言が動詞の場合，受身，可能，使役という表現も用いられる。したがって，主語節の節末の用言は理論的且つ文法的につぎのような形式が考えられる。

①形容詞 例：美味しい

	現在形	過去形
肯定	～が美味しいのは～。	～が美味しかったのは～。
否定	～が美味しくないのは～。	～が美味しくなかったのは～。

②形容動詞 例：綺麗だ

	現在形	過去形
肯定	～が綺麗なのは～。	～が綺麗だったのは～
否定	～が綺麗じゃないのは～。	～が綺麗じゃなかったのは～

③動詞 例：食べる

	現在形	過去形
肯定	～が食べるのは～。	～が食べたのは～。
否定	～が食べないのは～。	～が食べなかったのは～。

	現在進行形	過去進行形
肯定	～が食べているのは～。	～が食べていたのは～。
否定	～が食べていないのは～。	～が食べていなかったのは～。

2個以上の用言が述語として一緒に使われている時，最後の用言の活用形を連体形にすればいい。

受動文，可能文，使役文の節末用言の接続例を見よう。

例詞：言う (受動文)

	現在形	過去形
肯定	～が言われるのは～。	～が言われたのは～。
否定	～が言われないのは～。	～が言われなかったのは～。

	現在進行形	過去進行形
肯定	～が言われているのは～。	～が言われていたのは～。
否定	～が言われていないのは～。	～が言われていなかったのは～。

例詞：言う (使役文)

	現在形	過去形
肯定	～が言わせるのは～。	～が言わせたのは～。
否定	～が言わせないのは～。	～が言わせなかったのは～。

	現在進行形	過去進行形
肯定	～が言わせているのは～。	～が言わせていたのは～。
否定	～が言わせていないのは～。	～が言わせていなかったのは～。

例詞：話す (可能文)

	現在形	過去形
肯定	～が話せるのは～。	～が話せたのは～。
否定	～が話せないのは～。	～が話せなかったのは～。

主語節を含む複文：

例①：私が選んだのは，彼です。

主語節

例②：国民の生命を守るのは

主語節

国家の責務だが，

述語

家族の健康を守るのは主婦の

主語節

最優先の役割ではないか。 [産経新聞]2008.2.6

述語

2. 述語節の分析

この節の特徴は複文の中で主節の述語の役割を果たすことである。主語・述語(主述)構造全体が主節の述語となるので，このような複文は主述述語文とも呼ばれる。

1) 述語節の節末用言

日本語の文末や節末の品詞が用言に限るので，述語節の節末の品詞は勿論用言である。具体的に形容詞，形容動詞，動詞及びそれらの後

に付く助動詞という品詞なので、述語節の節末用言は形容詞、形容動詞、動詞かそれらの後に付く助動詞に限る。

2) 述語節の節末用言の活用形

述語節の節末用言は終止形である。というのは、述語節は主節ではないが、主節の述語として用いられるので、複文の文末に位置するからである。

述語節の節末用言は連体形であるが、実際に文中に表れる時にボイス、アスペクト、テンス、ムードなどの形態素も層という形でそれに加わるので、必ずしも現在形や肯定形とは限らない。動詞の場合、過去形、否定形、進行形もありうる。また、節末の用言が動詞の場合、受身、可能、使役という表現も用いられる。

例①：陳さんは背が高い。

主語 述語節

例②：ローソンチケットはローソン店頭で

主語

24時間発券できる強みがある。

述語節

3. 目的語節の分析

この種の従属節の特徴は、複文の中に一つ目的語節を含み、その従属節全体が目的語となることである。つまり、単語の代わりに従属節が目的語として働くことである。目的語節は名詞節である。目的語節が節として認められる以上、節末がある。この節末こそ主節との接点である。この接点をうまく見つけ出せば、双方の主従関係も歴然になる。

1) 目的語節の節末用言

日本語の文末や節末の品詞が用言に限るので、目的語節の節末の品詞は勿論用言である。具体的に形容詞、形容動詞、動詞及びそれらに付く助動詞という品詞なので、目的語節の節末の用言は形容詞、形容動詞、動詞かそれらに付く助動詞に限る。

2) 目的語節の節末用言の活用形

目的語節の節末用言——形容詞、形容動詞、動詞及びその3者に付く助動詞の活用形はすべて連体形である。というのは目的語節の節末に

必ず“の”か“こと”などの形式体言が付くからである。

目的語節の節末用言は連体形であるが、実際に文中に表れる時、ボイス、アスペクト、テンス、ムードなどの形態素も層という形でそれに加わるので、必ずしも現在形や肯定形とは限らない。過去形、否定形、進行形もありうる。節末の用言が動詞の場合、受身、可能、使役という表現も用いられる。したがって、目的語節の節末用言は理論的且つ文法的につぎのような形式が考えられる。

①形容詞 例：美味しい

	現在形	過去形
肯定	～が美味しいのを～。	～が美味しかったのを～。
否定	～が美味しくないのを～。	～が美味しなかったのを～。

「の」のほかに、「こと」、「ところ」等も形式体言である。したがって、「を」の前は必ずしも「の」が使われるとは限らない。

②形容動詞 例：綺麗だ

	現在形	過去形
肯定	～が綺麗なのを～。	～が綺麗だったのを～。
否定	～が綺麗じゃないのを～。	～が綺麗じゃなかったのを～。

③動詞 例：食べる

	現在形	過去形
肯定	～が食べるのを～。	～が食べたかったのを～。
否定	～が食べないのを～。	～が食べなかったのを～。

	現在進行形	過去進行形
肯定	～が食べているのを～。	～が食べていたのを～。
否定	～が食べていないのを～。	～が食べていなかったのを～。

2個以上の用言が述語として一緒に使われている時、最後の用言の活用形を連体形にすればいい。

受動文、可能文、使役文の節末用言の接続例を見よう。

例詞：言う (受動文)

	現在形	過去形
肯定	～が言われるのを～。	～が言われたのを～。
否定	～が言われないのを～。	～が言われなかったのを～。

	現在進行形	過去進行形
肯定	～が言われているのを～。	～が言われていたのを～。
否定	～が言われていないのを～。	～が言われていなかったのを～。

例詞：言う (使役文)

	現在形	過去形
肯定	～が言わせるのを～。	～が言させたのを～。
否定	～が言わせないのを～。	～が言わせなかったのを～。

	現在進行形	過去進行形
肯定	～が言わせているのを～。	～が言わせていたのを～。
否定	～が言わせていないのを～。	～が言わせていなかったのを～。

例詞：話す (可能文)

	現在形	過去形
肯定	～が話せるのを～。	～が話せたのを～。
否定	～が話せないのを～。	～が話せなかったのを～。

主語節と目的語節の述語(用言)活用形の異同

(1) 共通点

両方とも連体形である。

(2) 相違点

主語節の述語後には“のが”, “のは”, “のも”などが付く。一方, 目的語節の述語の後には“のを”などが付く。

例①：私は イギリスに留学に行くのを
主語 目的語節

やめました。
述語

例②：私たちは,
主語

連戦主席が大陸を訪問するのを
目的語節

歓迎します。
述語

4. 連体修飾語節の分析

連体修飾語節は体言を修飾する以上, 複文の中, 体言である主語, 目的語, 対象語を修飾することができる。また, 連体修飾語, 状況語, 補語の中の名詞, 数詞などの体言を修飾することも多々ある。

1) 連体修飾語節の節末の用言及びその活用形

連体修飾語節節末の用言は動詞, 形容詞, 形容動詞及びそれらに付く助動詞である。

連体修飾語節の節末用言は文字通りの連体形であるが, 実際に文中に表れる時, ボイス, アスペクト, テンス, ムードなどの形態素も層という形でそれに加わるので, 必ずしも現在形や肯定形とは限らない。過去形, 否定形, 進行形もありうる。節末の用言が動詞の場合, 受身, 可能, 使役という表現も用いられる。したがって, 連体修飾語節の節末用言は理論的且つ文法的につきのような形式が考えられる。

①形容詞 例：美味しい

	現在形	過去形
肯定	～が美味しい体言～。	～が美味しかった体言～。
否定	～が美味しくない体言～。	～が美味しくなかった体言～。

②形容動詞 例：綺麗だ

	現在形	過去形
肯定	～が綺麗な体言～。	～が綺麗だった体言～。
否定	～が綺麗じゃない体言～。	～が綺麗じゃなかった体言～。

③動詞 例：食べる

	現在形	過去形
肯定	～が食べる体言～。	～が食べた体言～。
否定	～が食べない体言～。	～が食べなかった体言～。

	現在進行形	過去進行形
肯定	～が食べている体言～。	～が食べていた体言～。
否定	～が食べていない体言～。	～が食べていなかった体言～。

2個以上の用言が述語として一緒に用いられる時, 最後の用言の活用形を連体形にすればいい。

受動文, 可能文, 使役文の節末用言の接続例を見よう。

例詞：言う (受動文)

	現在形	過去形
肯定	～が言われる体言～。	～が言われた体言～。
否定	～が言われない体言～。	～が言われなかった体言～。

	現在進行形	過去進行形
肯定	～が言われている体言～。	～が言われていた体言～。
否定	～が言われていない体言～。	～が言われていなかった体言～。

例詞：食べる (使役文)

	現在形	過去形
肯定	が食べさせる体言～。	が食べさせた体言～。
否定	が食べさせない体言～。	が食べさせなかった体言～。
	現在進行形	過去進行形
肯定	が食べさせている体言～。	が食べさせていた体言～。
否定	が食べさせていない体言～。	が食べさせていなかった体言～。

例詞：食べる (可能文)

	現在形	過去形
肯定	が食べられる体言～。	が食べられた体言～。
否定	が食べられない体言～。	が食べられなかった体言～。

連体修飾語節は形式的には上記の例のように名詞などの体言を修飾するが、内容的にはそれらを限定する働きを持つ。

連体修飾語節と被修飾名詞などの体言との間に「との」、「という」という接続語が介在する場合もある。「内容節」とも言われているが、接続関係から言うと、複文の主従関係の成立に差し支えがないので、連体修飾語節と言える。

2) 連体修飾語節の修飾対象

連体修飾語節が修飾できる対象は大体つぎのような文の成分である。

(1) 主語を修飾する場合

例①：政府の方が熱心に国連安保理の
連体修飾語節

常任理事国入りを目指す日本、ドイツ、
連体修飾語節 主語

インド、ブラジルの4カ国グループは、
主語

国連に安保理拡大の 枠組み案
目的語

を正式に 提出した。
述語

例②：ロシアでは、
大統領の政敵が経営していた
連体修飾語節

大手資源会社のユコスが
主語

3兆円近くを 追徴された。
目的語 述語

2) 目的語を修飾する場合

例：私は彼が作ってくれた餃子を食べた。
主語 連体修飾語節 目的語 述語

3) 状況語の中の体言(名詞等)を修飾する場合

例①：ロバート国連事務次長補は 4月1日
午後、東京都内で 日本経済新聞記者
と会見し、国連改革の焦点である
連体修飾語節

安全保障理事会の常任理事国
状況語

枠拡大問題で
状況語

新案を提示した。
目的語 述語

例②：国土交通省は 神奈川県で
昨年九月の自動車火災が起きた 際に
連体修飾語節 状況語
三菱ふそうトラック・バス社に 詳しい
報告を求めた。

4) 補語の中の体言(名詞等)を修飾する場合

例：田中さんは明日、
おじいさんが嘗て留学していた都市に
連体修飾語節 補語
行く。
述語

5) 連体修飾語の中の体言(名詞等)を修飾する場合

例：①私たちは、
主語
イギリスに留学に行く学生たちの
連体修飾語節 連体修飾語
保護者を集めて説明会を行うつもりで
す。

6) 判断文の述語の中の体言(名詞等)を修飾する場合

日本語の述語は基本的に用言がその役割を果すのである。但し、判断文(名詞述語)の場合は例外である。判断文の文末述語は体言と判断助動詞からなるのである。述語の一部は体言である以上、連体修飾語と連体修飾語節に修飾されるのが可能である。

例：今回の事件発覚で改めて驚かされたのは、

主 語 節

日本の冷凍食品業界が1兆円産業に発
展しているという事実である。『産経新聞』2008.2.6

連 体 修 飾 語 節 述語の体言

5. 状況語節（連用修飾語節）の分析

1) 状況語節の三大特徴

状況語節は主節の述語または主節全般を修飾する。状況語節は他の六つの従属節と同様に、その節末の用言は形容詞、形容動詞、動詞及びそれらの用言に付く助動詞である。状況語節はつぎのような四つの特徴がある。第一、状況語節は、一つの活用形しか使わない他の従属節と違って、複数の活用を使う。第二、それらの活用形に助動詞や接続詞や助詞などが加わってからでない状況語節になりきれない。第三、状況語節を文中における具体的な役割によって様々な名目の状況語節に細かく分けることができる。第四、状況語節の節末は用言とは限らず、体言の場合もある。但し、その体言の前に連体修飾語節がある。つぎの2)の(7)はその例である。

2) 状況語節の種類

(1) 条件状況語節

- ① 仮定条件 天気が良ければ、私は釣りに行く。
- ② 反事実条件 あの時李さんが助けていなければ、陳さんは死んでいた。
- ③ 確定条件 立秋になったら、涼しくなるでしょう。
- ④ 恒常条件 パパとママが恋しくなったら、いつでも家に帰りなさい。
- ⑤ 事実条件 ここまでやれば、もう大丈夫だ

(2) 原因理由状況語節

台風が上陸したので、すべての便が欠航となった。

今は年末なので(だから)、デパートは混んでいると思います。

地震が発生したため、新幹線が自動的に停まった。

(3) 譲歩状況語節（仮定性逆接）

(が) 一生懸命勉強しても、合格しないだろう。

(4) 逆接状況語節（事実性逆接）

(が) 一生懸命復習したのに、合格しなかった。

(5) 目的状況語節

合格できるように、毎日10時間も勉強している。

日本に留学に行くために、毎日日本語を勉強している。

(6) 様態状況語節

彼女は狂うように踊っている。

(7) 時間状況語節

私が来たとき、雪は止んだ。

6. 補語節の分析

1) 補語節の節末用言

日本語の文末や節末の品詞が用言に限るので、補語節の節末の品詞は勿論用言である。具体的に形容詞、形容動詞、動詞及びそれらに付く助動詞という品詞なので、補語節の節末用言は形容詞、形容動詞、動詞かそれらに付く助動詞に限る。

2) 補語節の節末用言の活用形

補語節の節末用言は連体形と終止形の二つの可能性がある。連体形として用いられる時は名詞節である。主語節、目的語節、連体修飾語節などと同じように、「に格」の名詞節として表れる時、連体形であるが、述語の内容（と格）として用いられる時は終止形である。連体形と終止形の形式が同じなので、同じ活用形が用いられると思われがちであるが、実際はそうではない。また、実際に文中に表れる時、ボイス、アスペクト、テンス、ムードなどの形態素も層という形でそれに加わるので、必ずしも現在形や肯定形とは限らない。過去形、否定形、進行形もありうる。また、節末の用言が動詞の場合、受身、可能、使役という表現も用いられる。したがって、補語節の節末の用言は理論的

且つ文法的に色々な形式が考えられる。ここではその接続例の列举を省く。

7. 対象語節の分析

この種の従属節の特徴は、複文の中に一つの対象語節を含み、その従属節全体が対象語となることである。つまり、単語のかわりに一つの従属節が主節の中の対象語として働くことである。対象語節は名詞節である。対象語節が節として認められる以上、節末がある。この節末こそ主節との接点である。この接点をうまく見つけ出せば、双方の主従関係も歴然になる。

1) 対象語節の節末用言

日本語の文末や節末の品詞が用言に限るので、対象語節の節末の品詞は勿論用言である。具体的に形容詞、形容動詞、動詞及びそれらに付く助動詞という品詞なので、対象語節の節末用言は形容詞、形容動詞、動詞かそれらに付く助動詞に限る。

2) 対象語節の節末用言の活用形

対象語節の節末用言——形容詞、形容動詞、動詞及びその三者に付く助動詞の活用形はすべて連体形である。というのは対象語節は名詞節としてそれに必ず“の”か“こと”などの形式体言が付くからである。

対象語節の節末用言は連体形であるが、実際に文中に表れる時、ボイス、アスペクト、テンス、ムードなどの形態素も層という形でそれに加わるので、必ずしも現在形や肯定形とは限らない。過去形、否定形、進行形もありうる。また、節末の用言が動詞の場合、理論的に受身、可能、使役という表現形式も考えられる。

例①：私は、人に指図されるのがいやです。

対 象 語 節

例②：年よりたちは、

お茶を飲みながらよもやま話をするのが

対 象 語 節

好きである。

第三章 複文の階層

複文の構造上の特徴は、文の構成要素に直接

的な関わりがある。これまで文の構成要素一品詞と文の成分を分析したが、これらの要素が複文にどのように関わり合うか、を分析することは複文の研究上極めて重要なことである。

一、複文の階層の定義

多くの日本語研究論文では、層という文法用語を使っている。例えば、つぎの文中の述語は語幹とボイス、アスペクト、テンスなどに細かく分けられている。

彼は「誘わ—れ——てい——た——み—た—い—だ—
語幹 ボイス アスペクト テンス 事態にたいするムード

——ね。」

聞き手にたいするムード （複文の研究(下) 伊田義雄編

上記の層は層であるが、意味論の角度から見れば、明らかにそれは複雑な文法的意味を表すために述語の語尾活用によってできた述語内部の層であり、一種の複合述語または述語の複合体に過ぎない。というのは、「日本語は膠着語なので、述語部分に文法的意味を表す形態素が連鎖していくという特徴があります。」『新しい日本語入門』p.73からです。しかし、この論文で提起する層は複文の中にある複数の節の関わり合いによってできた層で、つまり複文の中の主節と従属節からできた層のことである。したがって、用語の混乱を避けるため、ここでは階層という言葉を使う。

複文は一つの文の中に二つ以上の文（主述構造又は述語を中心とする構造体）があり、しかもそれらが非対等的でお互いに従属と被従属の関係にある文である。このような非対等的で従属的な関係の存在が一つの文の中に階層を形成させたのである。一つの主従関係に二つの階層が形成される。主節は第一階層、従属節は第二階層である。

例：検疫当局は中毒を起こした

(主節の)主語 連体修飾語節(従属節)

食品の保存サンプルを 検査した。

(主節の)述語

複文は主従関係が一個しかないとは限らない。これまで分析してきた複文は、説明しやす

く理解しやすくするように、従属節が1種類しかない復文を例にしたものである。しかし、私たちが実際に文章を読んだり人の話を聞いたりした時に触れた復文は、その中の主節と従属節などの節の数が三つ以上あり、それらの関係が縦横複雑に絡んでいるものが圧倒的に多い。このような復文を総合複文と名づけてここで分析してみよう。

二、総合複文の階層の分析とその表示

若し、その従属節自身も二つの主述構造又は述語を中心としたまとまりから構成されている節であれば、その従属節の中にも主従関係があり、二つの階層があることを意味する。その時、複文の第二階層である従属節は第一階層（主節）に従属しながら、その自身も従属節を持っているので、その従属節に対して主節として働く。階層的に言う、その時、複文全体に垂直的に三つの主述構造または述語を中心としたまとまりつまり節と二つの主従関係があるので、三つの階層ができたのである。一つの複文の中に垂直的な主従関係が多ければ、多いほど縦割りの階層が多くなり、文が複雑になる。また、例②のように同じ層に二つの節が並立することもありうる。

例①：いずれの国も イラク戦争に反対する
第一階層(主節の主語) 第四階層(連体修飾語節)

ドイツ、フランスなどを「古い欧州」
第三階層(連体修飾語節)

と揶揄したラムズフェルド米国防長
第二階層(連体修飾語節)

官が「新しい欧州」と呼ぶ 国 だ。
第二階層(連体修飾語節) 第一階層の述語

この複文の第一の主従関係はつぎのような①と②の関係である。

いずれの国も
第一階層①(の主語)

ラムズフェルド米国防長官が「新しい
第二階層②

欧州」と呼ぶ 国 だ。
第二階層② 第一階層①(の述語)

この複文の第二の主従関係はつぎのような②と③の関係である。

ドイツ、フランスなどを「古い欧州」
第三階層③

と揶揄したラムズフェルド米国防長
第三階層③ 第二階層②

官が「新しい欧州」と呼ぶ
第二階層②

この複文の第三の主従関係はつぎのような③と④の関係である。

イラク戦争に反対する
第四階層④

ドイツ、フランスなどを「古い欧州」
第三階層③

と揶揄した
第三階層③

例②：英会話のクラスでアメリカ人に
第一階層(主節)の補語

「ノーならノーと、もっとはっきり言
第三階層 第二階層・1(補語節)

いなさい。あなたがた日本人のその曖
第二階層・1(補語節)

昧な態度は無責任ですよ」
第二階層・1(補語節)

と注意され、
主節の述語(1)

山下秀雄氏の『日本の言葉と心』とい
第二階層(補語)

う本に、

日本人が一般的にはっきりノーと言わ
第三階層(補語節) B

ないのは、日本語の構造と関係がある
第三階層(補語節) B

のでは、と
第三階層(補語節) B

書いてあったのを思い出した。
第二階層・2(目的語節) 主節の述語(2)

上記の例文で示されているように、3階層以上もある複文の場合、第一階層(最上位の階層)は主節の役割しかなく、最下位の階層は従属節の役割しかない。両者の間に位置する節は相対的なものであり、つまりその上位の節に対して

は従属節、その下位の節に対しては主節という二つの役割を兼ねているのである。総合複文のこのような複雑な、主従関係によってできた階層は立体的または層状的に表現できる。

1) 総合複文の階層の層状表示法

複文の階層の層状表示法は、総合複文において、複数の節間の主従関係をその上位の順から下位へと細分化することである。3階層(節)以上の複文に2個以上の従属節があるので、それらの関係を立体的に表示することによって、その上位階層にある節に含まれるすべての従属節(階層)が立体的に浮かんでくる。

いずれの国も イラク戦争に反対するドイツ、
第一階層①(の主語)

第二階層②

第三階層③

フランスなどを「古い欧州」と揶揄したラムズ

第二階層②

第三階層③

フェルド米国防長官が「新しい欧州」と呼ぶ

第二階層②

第四階層④

国だ。

第一階層①(の述語)

例：賈慶林・中国人民政治協商会議主席は

第一階層(主語)

3月31日、「連戦主席が都合のいい時に
状況語

第二階層(補語従属節)

第三階層(目的語節)

第四階層

大陸を訪問するのを歓迎する」と述べた。

第一階層(述語)

第二階層(補語従属節)

第三階層(目的語節)

上記の例文のように2個以上の主従関係がある複文の方が多い。主従関係が多ければ多いほ

ど複文の階層が多くなる。そういう場合、第二階層以下の節は主節かそれとも従属節かは相対的なものになる。つまり、ある節はその上の階層の節を修飾すると同時にその下の階層の節に修飾されるのである。その時、その上の節にとってその節は従属節であるが、その下の階層の節にとってその節は主節である。また、二つ以上の主従関係のある文において、第一階層の、純然たる主節を除いて、上位の節はその下位のすべての節を納めていながらそのすぐ下位の節と主従関係を成すのである。上記の二つの例文とも4階層の複文である。第二階層は第一階層の従属節でありながら、その自身も従属節を抱えている。したがって、4階層があるにもかかわらず、第二階層以下の節はすべて第一階層の従属節と見なしでもいい。それを細分化すると第三階層、第四階層は次々と見えてくる。

ミサワホームホールディングスは25日、

第一階層(主節・主語)

内外10ヶ所で保有するゴルフ場の処理費用が約

第二階層(補語節)

第三階層(連体修飾語節)

380億円になると発表した。

第一階層(述語)

第二階層(補語節)

上記の例文で示しているように、第二階層②はその上位の第一階層にとっては従属節、その下位の第三階層にとっては主節である。また、第二階層以下の「内外10ヶ所で保有するゴルフ場の処理費用が約380億円になる」部分は一つのまとまりとする場合は、その下位のすべての階層を納めているのである。こういう場合、第二階層の一部は第三階層と重複しているのである。上記の三つの例文の網掛け部分が重複しているのはそれを物語っているのである。

2) 総合複文の分解表示法

総合複文の分解表示法は、総合複文のすべての節(階層)を解体しそれらを個々の独立した文または節にして、上位の順から並べることである。前記の例文をこのような方法で分解する

と、つぎのような形式が表れる。

いずれの国も 国 だ
第一階層(主語) 第一階層(述語) ①

ラムズフェルド米国防長官が「新しい欧州」と呼ぶ
第 二 階 層 ②

ドイツ、フランスなどを「古い欧州」と揶揄した
第 三 階 層 ③

イラク戦争に反対する
第 四 階 層 ④

つぎのように表示してもいい。

第一階層 主節 いずれの国も 国だ。

第二階層 ラムズフェルド米国防長官
が「新しい欧州」とよぶ

第三階層 ドイツ、フランスなどを
「古い欧州」と揶揄した

第四階層 イラク戦争に反対する

上記の復文の構造は複雑なので、意味が読み取りにくい。階層が多くて、節と節との関係が複雑に絡んでいるからである。しかし、復文を上記のように幾つかの単文に解体すると、それぞれの文の構造が歴然となる。そういう場合、多重の主述構造や主従関係を持つ復文を正しく且つ要領よく解体できる能力が求められる。要するに日本語の復文の中にどれぐらいの従属節があるか、またそれらの従属節の文法的な特徴は何か、を知っておかなければならないのである。

3) 総合復文の階層の括弧表示法

総合復文の階層の括弧表示法は、総合復文において、複数の節の主従関係をその上位の階層の順から下位へと括弧の大きさと代数式的に細分化することである。どんな複雑な復文でも文法的な間違いさえなければ大小不同の括弧で最上位の主節から最下位の従属節まで各階層を節ごとにくっきり分けることができる。

まず、同じく前記の例文で示すと、つぎのようになる。

例①：いずれの国も { (イラク戦争に反対する) ドイツ、フランスなどを「古い欧州」と揶揄した } ラムズフェルド米

国防長官が「新しい欧州」と呼ぶ 国だ。

例②：賈慶林・中国人民政治協商会議主席は3月31日、[[連戦主席が(都合のいい)時に大陸を訪問するのを] 歓迎する] と述べた。

更につぎの例を見よう。

例③：NECは、{ [現地企業のホームページで海外のブランド品の流行や価格を調べたり(旅行に行く)前に現地のレストランや名産物をチェックしたりするのにも] 役立つと] 見ている。

※網掛けの空白部分にその節の主語が省略されている

例④：英会話のクラスでアメリカ人に{ (「ノーならノーと」) もっとはっきり言いなさい。あなたがた日本人のその曖昧な態度は無責任ですよ } と注意され、山下秀雄氏の『日本の言葉と心』という本に、{ (日本人が一般的にはっきりノーと言わないのは) }、日本語の構造と関係があるのでは、と書いてあったのを思い出した。

例⑤：自動車免許区分変更は、[普通免許で運転できる車のサイズを狭める] ことで、{ (普通免許しか持っていない) ドライバーが運転しなれないトラックなどを運転して引き起こす] 交通事故を抑制することが狙い。

上記の括弧表示法で処理されている例文について、①全然括弧を付けられていない部分は主節、②両側とも括弧を付けられている部分は純然たる従属節、③片一方だけ括弧を付けられている部分は、その上位の節に対しては従属節の役割、その下位の節に対しては主節の役割を果すのである。

また、復文の階層は縦割りの重複構造であるが、同一階層に従属節の並立もありうる。上記の例文④と⑤ではこの現象が現れている。し

たがって、括弧法では同じ大きさの括弧が複数回用いられることがある。上記の例文中の「ことで」は主節の成分（状況語）であり、それを「【普通免許で運転できる】車のサイズを狭める】」部分が連体修飾している。それと同一の階層の成分として「【（普通免許しか持っていない）ドライバーが運転しなれないトラックなどを運転して引き起こす】交通事故を抑制することが狙い。】」部分は主節の述語を務めるが、それが幾階層も持っている複文なので、「【】」で括弧されているからである。また、「【】」が複文の最後に付けられるのもこの複文の述語が述語節（主節に対す従属節）として表れているからである。結局、この複文の括弧されていないところは「自動車免許区分変更」部分と「ことで」部分だけであり、主節である。

三、複文の階層分析と表示の意義

階層分析と表示の意義は、文中において相対的に独立している各節（主述構造か述語を中心としたまとまり）の中にある文の成分が、他の節にある文の成分に直接に関わらないようにすることができる場所にある。

前記の例文をもう一回見よう。

いずれの国もイラク戦争に反対するドイツ、フランスなどを「古い欧州」と揶揄したラムズフェルド米国防長官が「新しい欧州」と呼ぶ国だ。

この文の階層（節）間の関係はすでに色々な方法で分析しており、つぎのような四つの階層（節）がある。

- ① いずれの国も国だ。
- ② ラムズフェルド米国防長官が「新しい欧州」と呼ぶ
- ③ ドイツ、フランスなどを「古い欧州」と揶揄した
- ④ イラク戦争に反対する

この文を冒頭から読むと、最初に「いずれの国もイラク戦争に反対する……。」という文面が目に入る。しかも主語も述語もあるので、文として成立できる。しかし、実際の意味から見てこの文を成立させてはいけない。作者は

「いずれの国もイラク戦争に反対する」古い欧州の国々であると言っているのではなく、新しい欧州の国々のことを言っているのである。なぜかというところ、上記の4つの階層に分解されたそれぞれの節を見て分るように、この複文の中で、いずれの国（主語）と反対する（述語）との間に主語・述語関係がないからである。複文の階層（節）間の関係を正しく分析し整理できれば、このような意味の取り違いはありえない。

おわりに

日本語の複文システムはあまり厳密的でないという主張があるが、複文中の節と節の関係、接続方法、階層などを見るとかなり厳密的であるといえる。厳密的な複文を分析し研究することによって複文の構造と階層をパターン化することができた。初めての試みなので、これから更に研究を重ねていく必要があると痛感する。

参考文献

- ・ 複文の研究(下) 仁田義雄編 くろしお出版 1995
- ・ 新しい日本語学入門 庵功雄著 スリーエーネットワーク 2001
- ・ 複文 益岡隆志 くろしお出版 1997